
FANTASY ULTRAMAN パイロットフィルム

宇宙色の種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FANTASY ULTRAMAN パイロットフィルム

【Nコード】

N9718N

【作者名】

宇宙色の種

【あらすじ】

魔法と科学が存在するデスペアー大陸。その大陸には現在五つの国が存在している。

人間が治めるホークランド王国。エルフが治めるファーゼルム共和国。ドワーフや獣人などが治めるイディアート連合王国。全ての人が行き来できる中立国カスピアス。そして魔族が支配するクラプター帝国。

大陸全体の支配を企むクラプター帝国戦闘魔族軍（略して戦魔軍）とそれ以外の国で組織された連合軍は千年以上にわたって戦い続け

てきた。

つかの間の平和が崩れ去ったとき巨人が大地に降り立つ。

（前書き）

好評であれば連載しようとも考えています！

ご意見、ご感想待ってます！！

また主人公であるウルトラマンの名前と必殺技の名前、変身アイテムの名前と形を募集しています。
思いつきでも構いませんので待ってます！！！！

魔法と科学が存在するデスペアー大陸。その大陸には現在五つの国が存在している。

人間が治めるホークランド王国。エルフが治めるファーゼルム共和国。ドワーフや獣人などが治めるイディアート連合王国。全ての人が行き来できる中立国カスピアス。そして魔族が支配するクラプター帝国。

大陸全体の支配を企むクラプター帝国戦闘魔族軍（略して戦魔軍）とそれ以外の国で組織された連合軍は千年以上にわたって戦い続けてきた。圧倒的に不利な連合軍が戦えたのは預言者と呼ばれる賢者が存在していたからだった。しかし最後の預言者は時の流れに抗うことは愚かしいことと言って三百年前に魔法による延命をせずに永眠した。

最後の預言者は死に際にとある預言を残した。

「銀色の巨人が再び大地に降り立つとき、デスペアー大陸はその終焉を迎えるであろう…」

この預言が正しいか、否か？銀色の巨人とは何か？デスペアー大陸の終焉とはどのようなものなのか？その答えを知る者はいなかった。

それから三百年、戦魔軍と連合軍との間で停戦協定が結ばれ、戦魔軍は占領地域から撤退。連合軍は解散し、デスペアー大陸には束の間の平和が訪れていた。

各国の平和と相互理解のために三百年前の最後の戦争のあと、中立国カスピアスのフリーデン地方に設立されたのがここウインダミア科学・魔法学校だった。

「おい！セイヤ！！始業式から遅刻とは良い度胸だなっ！！アアッ！！！！」

怒られているこの青年こそがこの物語の主人公、セイヤ・ギブソン。170台後半ほどの身長、この世界では珍しい黒髪に黒い瞳。ルックスも決して悪くない。

そしてセイヤを鬼も真つ青になるような顔で怒っている銀縁の眼鏡をかけたナイスバディな女性はこの学校の校長でありセイヤの育ての親であるニコール・メノウズだ。そんなニコールに

「ニコールさん……。他の生徒達が引いてるからやめたほうがいいんじゃないの？」

と壇上で普段のお淑やかな言動をかなぐり捨てたニコールに衝撃を受けている全校生徒を笑顔で見つめながら注意するセイヤ。すると

慌てて

「遅刻はいけませんよ、ギブソン君。おほほほほほ…」

といきなり態度を変えたニコールを見て一人爆笑するセイヤだったが、クラス分けを聞いた瞬間、顔に笑顔を張り付けたまま凍りついてしまった。

1年S組

魔法力、知力、体力共に非常に優れていなければ入ることができない特別クラス。別名チート組。そんなクラスに無理矢理入れられたセイヤは先程とは打って変わってぐったりとしていた。すると、

「そのあんた！初日に遅刻なんて何様のつもり！！バカじゃないの！！！」

とクラス委員長の腕輪を着けた金髪碧眼の美少女が怒ったような口調で話しかけてくる。セイヤは尖った耳と容姿、魔力からエルフ族と判断し

「誰だよお前？ていうかお前には関係ねえよ。この尖がり耳が」

とバカにしたお返しに言い返す。すると女子は顔を真っ赤にして

「尖がり耳いい！！！！よくも学年主席であり、クラス委員長である私、ライラ・ハイデンにそんな口を聞いてくれたわね！！死んで詫びなさい！！！！！！」

と怒鳴り散らしながら魔力を練り始める。

「おいっ！ちょっと待て！！こんなところで魔法を使ったら……！！」

セイヤは止めようとするがライラはそんなのお構いなしに詠唱を始める。

しかもほとんどの魔導師が扱えないほど強力な上級魔法を。

「光よ。金色の輝きよ。我に力を。そして敵対者に最後の審判を……」

こんなところで上級魔法をぶっ放されればセイヤはもちろん、校舎の半分が消滅してしまう。最後の一言を阻止すべく一歩踏み出した瞬間、背が高く、真っ赤な髪の毛をしたイケメン男子が顔を真っ青にして教室に大声で叫びながら入ってくる。

「大変だっ！！おいっ！！セイヤっ！！！！学年一の美少女であるライラ様と喧嘩している場合じゃねえぞ！！！！！！」

セイヤの悪友である勇者候補生、リース・フェオウエンだ。リースの言葉に気を取られてしまったライラは練り上げた魔力が消滅させてしまう。校舎半壊の危機が過ぎ去ったことにホッとしつつリースに

「どうしたんだ」

と訊ねるセイヤ。するとリースは最悪の事態が発生したことを告げる。

「クラプター帝国が連合国に宣戦布告したんだ」

平和なひと時が崩壊した瞬間だった。慌てて教室のテレビをつける
とそこには宣戦布告の文章を読み上げるクラプター帝国の皇帝、ク
ラプター十一世の姿があった。

「…よって余は連合国に対し宣戦を布告するものである。そして連
合国はその属国となっているカスピアスと共に巨大な鉄槌が下され
るであろう！」

大歓声を上げる聴衆。

その瞬間、カスピアス国防軍の魔導師と衛兵が教室に入ってきて告
げる。

「学園の方にクラプター帝国の巨人兵が向かっている！ここから急
いで避難しなさい！！」

その言葉を聞きパニックに陥った生徒達が我先とばかりに逃げはじ
める。岩石人形の魔法を応用して創られた体長50メートルほどの
巨人兵は今や存在しない特A級の最前任魔導師以外倒すことはでき
ない。セイヤも逃げる準備をしつつ逃げようとしないうちにライラに向か
って叫ぶ。

「オイ！！お前も早く避難しろよ！！！」

しかしライラは笑みを浮かべながら言い放つ。

「フツ。逃げるわけじゃないじゃない。私は戦うわ」

「何バカな事言っただよ！ヴァンガード相手に勝てる分けねえだ

る！！」

何とか説得しようとするセイヤだったがライラはそれを無視して教室の窓から浮遊魔法で飛び立ってしまう。

「バツカ野郎おおおおっ！！！！！！！」

セイヤの怒りの叫び声が誰もいない教室に響き渡った。

カスピアス軍の兵士と魔導師達のヴァンガードへの攻撃が始まる。

「大地よ。我が母なる者よ。我が楯なり我が身を護り、我が剣となり敵を打ち碎け。ソイル・ブレイド！！！」

「炎よ。赤き断罪者よ。許されざる罪人達を躊躇なく焼き払いたまえ。ファイヤー・ボール！！！」

「風よ。見えぬ天空の支配者よ。迫り狂う嵐を鎮め、大空に輝きをもたらしたまえ。ウィンド・アロー！！！」

「全火砲、打ち方始め！！！！！！！」

次々と繰り出される攻撃をもともせず防衛線を容易く突破するヴァンガード。

「攻撃が全く効かない！！！」

「退避……うわぁ——っ！！！！！！！！！」

魔導師からの攻撃を受けても傷一つつかないヴァンガードは口から光線を放ち、兵士や魔導師達を虐殺していく。火の海となっている最前線に到着したライラは地上に降りて魔力を練り上げながら詠唱し始める。

「光よ。金色の輝きよ。我に力を。そして敵対者に最後の審判を。シャイニング・キャノン！！！！」

巨大な金色の砲弾はヴァンガードを吹き飛ばした。

「やった！」

しかしヴァンガードはゆっくりと何事もなかったかのように立ち上がる。

「嘘……」

上級魔法で掠り傷しかつかないヴァンガードに改めて恐怖を覚えるライラ。そんなライラを抹殺すべく巨人兵はライラの方に向かって歩き始めた。

巨人兵と戦うべく一人で飛び立っていったライラを追いかけるセイヤ。すると金色の光弾がヴァンガードに命中するのを目にする。撃破されたかのように見えたが倒れただけだった。平然と立ち上がり光弾が放たれた方向に向かって歩きはじめる。ライラを助けるべく走るが到底間に合いそうにない。諦めかけていると“アレ”がほのかに熱帯びるのを感じ、ポケットから取り出す。青いクリスタルの

部分から光を発する“アレ”を少し見つめた後、セイヤはそれを見上にかざした。

光。

辺り一面を真っ白な光が包み込む。ライラ、生き残っていた魔導師達、学園や街から避難していた人達、カスピア国防軍の軍人達。全員があまりにも強烈な光に目を手で覆ったり、顔を背けたりしている。

徐々に光が収まってきたので恐る恐る見るとそこには白く輝く瞳、胸の赤いプロテクターと体の青い線が印象的な銀色の巨人がいた。

「あれは…まさか、預言の巨人…？」

預言の事を知っていたライラが巨人の事を見上げながら掠れ声で呟く。兵士達や魔導師達も呆然と巨人を見上げる。ヴァンガードもどうしていいかわからないらしく巨人を見たまま動かない。

「チュアッ！！！」

ヴァンガードに対し構える巨人。どうやらヴァンガードは巨人を敵と認識したようで巨人の方に向き直り口から光線を放つ。それを両手を前に突き出しシールドを形成して防ぐと接近し渾身の右ストレートをヴァンガードの顔面にお見舞いする。

「トウアアアアアアッ！！！！！！！！！」

激しい衝撃音と共に倒れる巨人兵。立ち上がるうとするヴァンガードを持ち上げ、

「シエアアアアッ！！！！！！！！」

そのままバックドロップを決める。さらにヴァンガードの両足を掴み、

「ハアアアアアッ！！！！！！！！！！」

投げ飛ばす。ゆっくりと立ち上がったヴァンガードの顔面に飛び蹴りをお見舞いし振り返りざまにバックキックを放とうとするがヴァンガードはそれを回避し無防備な巨人の腹部にパンチを叩き込む。

「ドウアアアッ！！！！！！」

あまりにも強力なパンチを受けて吹き飛ばされる巨人。立ち上がるうとする巨人を更に蹴り、追い打ちをかける。

「デュアアアアッ！！！！！！！！」

殴られ蹴られ為す術もなく地面を転がる巨人。ヴァンガードは巨人の首を掴み投げ飛ばす。

「ドアアアアアッ！！！！！！！！」

胸のプロテクターの間についている青く輝いていた矢尻型のランプが

ティコン…ティコン…

と警告音を発しながら赤く点滅し始める。巨人はヴァンガードの蹴りを転がることで避け、立ち上がるとバク転して距離を取り、構え

る。

「ハッ！！！！」

巨人は両腕を胸部のプロテクターに添えたあと金色に輝き始める両腕を上へ、そして左右へと伸ばしていき、胸の高さにまで持つていく。どんどん輝きが増していく両腕。

「デアッ！！！！」

右手を一旦、左腕に添えた後、両腕を十字に構え右手から必殺技である光線を放つ。

光線を受けたヴァンガードは大爆発を起こし消滅した。

人々が歓声を上げる中、巨人は空高くに飛んで行く。

そんな中、ライラはこの巨人が預言の通り大陸を滅ぼす存在なのだろうかと考えていると後ろから頭を叩かれる。振り返るとそこには笑顔のセイヤがいた。

「こんなところで委員長なんかが油売ってていいのか」

というセイヤの問いに顔を真っ赤にして

「う、うるさいわね！！！！あんたには関係ないでしょっ！！！！」

と噛み付くライラ。そんなライラを見て吹き出してしまったセイヤはこの後、タコ殴りにあったのであった。

彼らはまだ知らない。この大陸の未来と希望を賭けた戦いに巻き込まれていくことを。

（後書き）

ノリで書き上げた作品ですがよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9718n/>

FANTASY ULTRAMAN パイロットフィルム

2010年10月9日16時13分発行